講演

新制大学史編纂の課題

―『東京大学百年史』（通史三）の編纂を中心にして―

中野　実

一、はじめに―窮屈な思い

中野でございます。レジュメに沿って一から五までお話しいたします。「窮屈な思い」という副題を付けました。その一つは、私自身が新制大学の成立とか、敗戦以後の大学史について研究論文を書いたことがないからです。新制以後を対象とした『東京大学百年史』（通史三）の編集に携わったぐらいです。広大の五十年史編纂では、これまでの日誌を読んでみますと、九州大学をはじめとして戦後大学史を書かれた方たちをお呼びになってお話を聞いております。私の恩師でもあり、かつ百年史編集委員会委員長であった寺崎昌男先生も呼ばれて、本紀要第一号に「百年史」の編纂にも言及しております。いまさら私が何を喋れるのか、というのが窮屈な思いの二つ目の率直な感じです。最初にお話になった羽田貴史さんは『戦後大学改革』という著書をまとめられています。羽田さんには「百年史」編纂当時から大変お世話になってきております。何となく、前後から挟まれているという感じでおります。

お話は全体として、編纂、資料、叙述の三点にわたってお話をいたします。最初は『東京大学百年史』（通史三）の編纂についてです。この「通史三」が新制東京大学を取り上げた巻になります。戦後の時期区分について、「百年史」は一九四五年で切らず、戦時体制の払拭ということで一九四七年ころまでを戦前の巻（「通史二」）に収めました。一九四九年以降の新制東京大学は、通史第三巻から始めておりますが、占領軍による教育改革の動きは、さかのぼって取り上げました。これまでの大学史に一つの新しい時期区分を出したという認識がありました。ついで、「百年史」編纂にあたっての基幹的資料などの紹介をし、さらに実際の執筆課題、叙述についてお話をいたします。

二、『東京大学百年史』（通史三）の編纂

1　基本方針

まず第一は、百年史（通史三）の基本方針は、「とりあえず何しろ書いてみよう」というのが基本方針だったような気がします。東京大

学は昭和戦前期に『東京帝国大学五十年史』を刊行しております。しかしそれ以降、部局史を除けば、全体像はどこにも描かれませんでした。そのなかで今回の「百年史」は、既刊の「五十年史」に新しい五十年分を追加するのではなく、創設の最初からやっていくという方針でした。その限りで言えば戦後史もちゃんと書かなければいけないということでしたが、参考とすべき大学沿革史誌類も少ないこともあり、とりあえず何しろ書いてみようというような雰囲気でしたし、私もそのように理解しておりました。基本的にこれが枠組みを作っていたような気がいたします。ですから、手探り状態で始めたと言ってよろしいと思います。

それに対して、「通史一、二」の場合は、本格的な歴史編纂物にするという気持ちはかなり明確にありました。『東京帝国大学五十年史』を超えるんだというのは確かにありました。実務を担当した私としては、「通史一、二」には大学・高等教育史の最新の研究成果を踏まえ、盛り込むという気持ちがありました。しかし、それらは一人の人間の力量だけでは出来ません。百年史編集室の室員の方たちをはじめ、多くの方たちとの協力によりできたと思っています。例えば国立大学の年史には、これまで科学技術政策のことが書かれることはありませんでした。「百年史」の室員にもその専門家がいなかったのです。そこでいろいろ手づるをたよって、某大学の学生が戦前の科学技術政策を修士論文にまとめたと聞き、ヒヤリングを行ったこともありました。さらに戦前期の大学と軍部との関係については、軍部の圧力の下にねじ曲げられた大学の自由、学問の自由、というのが常套句のようです。しかし、私の感想によれば、それらの記述の大部分は実証もなく書かれています。編集室には日本近代史の方が多数おられました。彼らは日々自らの専門においても、政治家とか軍人の日記をよく読んでいますから、そこら辺の情報には精通しておりました。軍人の日記を読むとですね、やっぱり書いてあるんですね、「今日は東大の総長に会った」とかですね、「こういうことを申し入れた」とかちゃんとあるんですね。そういうのが「通史二」に生かされました。それに対して「通史三」はとりあえず何しろ書こう、書ききろうというスタンスで始まったと思います。

2　執筆体制

執筆体制は「通史三」になりますとそれまでに二巻を出しておりまして、この人はこの分野だろうという形で、一、二巻で担当してきたものを三巻で継続するという形を採りました。大まかに言えば教育史関係の人が、管理運営の問題、学部通則の制定といった事柄を担当する。政治・社会と東京大学、国際交流、対外活動、学生生活とかですね、そういうのは主に日本史の系統の人が担当しました。これまでの「通史一、二」の担当を継続して優先したということです。このほか、新制東京大学のイメージを共有するために、編集室の中に研究会を組織して、執筆体制をサポートするようにしました。

3　校訂作業

今回の「通史」編纂には校訂という作業がありました。寺崎先生も

紀要第一号に述べられているように、「百年史」の通史編纂は、執筆担当者から出された原稿を一度タイプ稿という原稿に起こしまして、それに少数の校訂者が校訂をして、入稿原稿にするという手順を取りました。この校訂の作業を経て入稿するわけなんですけれど、スケジュール通りに進まないというのが実状でありました。それはどんどん後になるほど厳しくなってきました。

「通史二」を出して「通史三」が出るまで、ほぼ一年間の余裕があるはずですね。本の奥付には各巻三月とありますけど、私の記憶だと本格的納品は連休明けぐらいだったと思います。単年度決算の関係だと思います。「通史三」の時には、校訂作業を非常に短期間でやらなきゃいけなかったんです。

一九八五年四月から「通史三」の校訂を開始します。ようやく前月の三月に「通史二」の下版をしたばかりです。「通史三」の校訂対象となった項目は一〇三ありました。その段階で出されていた原稿は、七二項目でした。三一もの未提出の原稿がありました。なおかつ概説もいまだ未提出という状況だったんです。普通、本の制作は千ページぐらいのものですと半年間くらいの期間がかかります。年度末刊行の予定で逆算していくと、九月には原稿全部が入っていなければならないわけですね。私と共に校訂を担当した方が、「通史編纂校訂作業手順案」というメモを作ってくれました。そこには、一九八五年三月一八日現在未提出の原稿も七月中には提出されるであろう、原稿二七項目も、八月以降の校訂も一日四、五項目のペースで進めるとのこと、以上経験上実行不可能な予定表となった、と書いてありました。校訂作業は勤務日数の関係、原稿の素読み、下調べなどのため、週に一回行っていました。そして、一日に四、五項目の校訂をこなすことは、ほとんど不可能でした。どこかでアクロバット的なことをしなければ、校訂を完了させられないということで、「通史三」の校訂作業は始まりました。

いろいろアクシデントがありまして、タイプ稿を作れないままに、生原稿に赤字を入れて入稿原稿にするということもやりました。いろいろな原稿が提出されましたから、校訂はその原稿にかなり手を入れるわけです。それは正確を期する、内容をより適切、豊かにするということで行うわけですけれども、かなりの大鉈を振るうことになります。「通史二」までは基本的に執筆者に戻していなかったのですね。校訂の途中は執筆者に見せない。あんまり気持ちいいものではないですね。一生懸命自分が書いたものが真っ赤になる、というのでは。このため疑問、不明箇所、補遺などは、校訂者が処理していたんですね。あるいは他の人間に頼んで「ちょっとこれ調べといてくれ」という形でやっていたんです。しかし、「通史三」の場合はこの方法では処理しきれないという事態に陥ったらしく、執筆者に返し始めたみたいですね。原稿にいろいろと疑問符を付けて、それに回答してもらうというようなことをやったみたいです。今回このテーマで話してくれと言われて久しぶりに「東京大学百年史（通史三）校訂関係綴」を見たら、そういう事態があったことを思い出しました。これまで忘れておりました。このように、「通史三」はかなりいろんなことでイレギュラーなことを重ねて刊行にこぎ着けたんだなと改めて思いました。校訂は

短期間で集中的に処理したということです。ですから、今から詳細に読むと、「通史三」にはかなりの間違いとかが出てくるんではないかという気がいたします。

三、資料について

1　基幹資料

まず基幹資料を取り上げます。東京大学（国立総合大学）の学内行政にかかわる基幹資料は評議会の記録になります。この評議会の記録は、最初の会議（一八八六年）から百年目の一九七七（昭和五二）年まで、室員の共同作業として議題が目録化されていました（ちなみに、評議会以前の諮詢会も同様に作成された）。「通史三」の場合も、各執筆担当者はテーマに従って、議題目録をもとに資料を集めました。

つぎに各種学内の委員会の記録があります。この時期には、「新大学制実施準備委員会」、「大学院実施準備委員会」などの学内の委員会が作られております。戦後一九四六年に設置された「教育制度研究委員会記録」もあります。東京大学は大正期の半ばくらいから、ある大きな改革課題が持ち上がると、すぐに評議会において議論するのではなくて、全学的な委員会を評議会とは別に作ります。まずそこで議論をして、評議会に答申を行い、その答申を評議会が認可するという形式を採ります。戦時下にあっても基本的には、この形式が継続されました。これがこの戦後改革期でも同じ方針が採られました。一九四七年に「新大学制実施準備委員会」というのができまして、教育基本法、学校教育法の公布を踏まえて、東京大学としての対応を整えるということになりました。この委員会の議事録が残っておりました。ですので、戦後の新制東京大学の記述は、この委員会の記録に多くを負っておりました。このほか「大学院実施準備委員会」、「大学制度審議会」、「総合計画委員会」などが続きまして、それらの各種の委員会の記録が残っております（なお、これらの委員会の基本答申は、『東京大学百年史』（資料二）に復刻してある）。それから「学内諸規則」という綴があります。これは学内の、例えば学部通則、委員会規則、運営規則などを作る時の原議が綴ってある簿冊です。これも学内の例規、規則の制定にあたっての基本資料となります。

基幹組織でありながらその活動に注目しなかったものとして学部長会議があります。非公式に昭和戦前期から学部長会議はありました（「通史二」参照）。このほかにも、研究所長会議などもありますが、それらの記録はまったく使いませんでした。どうして使わなかったのかと思うんですけれども、使った形跡は全くありませんし、私も記憶はございません。

「通史三」の対象で、大きな事柄にかかわる資料の一つとして、「大学紛争」関係資料があります。編纂途中に寄託された学生配布のビラ、パンフレットとともに、事務局の発行した資料や作成した文書があります。「東大紛争」は、現在の『学内広報』の前身になる『資料』、『改革フォーラム』などに限定して執筆が進められました。そのため、「大学紛争」関係資料は、いまだ未整理のまま保存されています。百五十年史ぐらいの時には使われるんだと思いますけれども、い

までも「紛争」関係資料は少しずつ集まってきております。

2　周辺資料

周辺資料としては、「通史三」にとって「東京大学新聞」がやっぱり大きな力でした。東京大学は大学としての広報メディアを、明治初期の一時期を除き、これまでほとんど持ちませんでした。明治一〇年代に東京大学法理文三学部の編集になる「学芸志林」がありましたが、短期間で廃刊になります。明治期には東京大学卒業生の親睦団体の機関誌「学士会月報」も出ております。この二つだけです。ですから、東京大学のことを知ろうとすると、恐ろしく無いんですね、メディアが。大正中期から「帝国大学新聞」が学生の手によって出されます。「東大紛争」が「学内広報」という新しいメディアを作ったのですね。どうも学生のビラに対抗するために作ったという面があるみたいで、学生の方がどんどんビラを作ってアップ・デートな情報を出しているのに、大学が何もやっていないのはおかしいんじゃないかというので出し始めた。これは大きかったと思います。

それからちょっと個別の課題になりますけど、学生生活実態調査というのを東京大学は一九五〇年からやっておりまして、この報告も現在まで続いている資料です。時期時期によって項目に変動はあるんですけれども、これは非常に継続性のある資料です。その資料が全部残っておりましたので、周辺資料に位置づけてはいけないんでしょうけれども、そういうものも資料として活用されました。

四、叙述について

1　課題

ここで言います課題は、実際的には校訂に関わってのお話になります。「通史三」の主たる対象は、「戦後大学改革と大学紛争」でした。そういう共通認識はあったと思います。戦後大学改革については、占領軍文書の収集、研究が進み、資料集、単著なども刊行されてきており、一つの画期となっていました。「東大紛争」は、社会的な関心の高さがあったと思います。はじめて「通史一」が刊行されたとき、ある評者はその巻ではじめて取り上げられた東京大学における最初の学生騒動である「明治十六年事件」に引き寄せて、「東大紛争」がどのように書かれるのか楽しみである、という趣旨のことを書いていたことを思い出します。ある意味において関心は集中していたのかも知れません。

2　執筆者

百年史編集室は執筆者に恵まれていたというのが、いまの印象です。戦後大学改革は寺崎昌男先生、「東大紛争」は伊藤隆先生が主に担当しました。ご存知のように、「東京大学百年史」を編纂する段階において、寺崎先生以外に戦後大学改革をまとめた研究者はほとんどいなかったのです。この二つのテーマについて、編集室にはほかに書ける人物はいなかったと思いますね。

今回の報告のため、あらためて「戦後大学改革」の初稿原稿を見てきました。すると、あまり修正が入っていないのです。修正できなかっ

たんではないかと正直なところ思うんですけれども、まさに勢いに乗って執筆者は、書かれたんではないでしょうか。ただいくつかの点で「東京大学百年史」のなかの戦後大学改革ということで縛りがあったと思いますけれども、寺崎先生の著書である『大学教育』を基本にしながらまとめられたと思います。GHQ/SCAP 文書は、寺崎先生もその収集、整理などに関わっておられましたが、ほとんど使いませんでした。女子入学に関してのGHQの指令を指摘するに止まりました。

3　叙述

「通史三」の叙述についてお話をする前に、まず校訂の一般的なことに触れておきます。校訂は要するに余計なものを省いて、正確を期するというのが、第一の目的なんです。寺崎先生も言っているんですけれども、書かれる方は書き出しにあたり、枕というか、そもそも云々ということで入らないとなかなか腰が据わらない。しかし、校訂者として通読してくると、そんな枕は不必要な訳で、テーマにすぐに入って貰って構わないというので、そういう箇所をバッサリ切る、ということをしました。

この校訂作業は「百年史」にとって非常に重要でした。原稿執筆の段階になると、いろんな原稿が出て来ます。広大の五十年史がどういう執筆体制を採るか分かりませんけれども、原稿の出来不出来は年齢、職掌に関係ないんですね。「百年史」も正直なところいろいろな原稿がありました。それを一定の水準と体裁とに整えるのは、大変厳しい作業でした。たとえば、学部、研究所の何年史をそのまま地の文で引用するとかがありました。校訂をやっていると、すこしおかしいなと感じるのです。どうしてそれが分かるのかというふうによく訊かれるんですけれども、読んでいると分かるんですね。いつもの書き方と違う、言葉遣いが違うとかですね、あまりこういう言葉を使わないということは分かります。書いたものの跡を取るということになるでしょうか。その処理としては書き直し、出典の明示、注書きなどを行いました。このような一般的な校訂は、当然「通史三」にもありました。

特に「通史三」でいいますと、「東大紛争」のことがメインになりますが、このときに「紛争」に関しては、先ほど言いましたように、『資料』、『改革フォーラム』、『学内広報』など、大学が出した記録を中心にして書くということでありました。この方針がいつ決まったのか、いまは記憶にありません。かなり早い時期に了解されたんだと思います。その他で参考にしたのが『東大紛争の記録』という本。その方法は、基本資料類から関係箇所を全部コピーして関連項目に分類して台紙に張り付け、それを読みストーリーを組み立てるという形でやりました。ですから「紛争」の記述には、当時いっぱいあった回顧録、批判的言説とかは全くないといってよろしいかと思います。事実を丹念に跡づけてみる、ということであったのかもしれません。

ただそのことを前提にして言いますと、「通史三」ではちょっとそれまでとは違った点がありました。それは「紛争」の記述について事務局（法規担当）の方に素読みを依頼したことです。これまで一度もしたことがありませんでした。最近、職員の方は異動が激しくて、前例とか文書の所在などを知らない状況になってきています。まだ当時、

東京大学には長く事務局に居て、法規に詳しい方がおりました。その方に読んでいただいて、疑問とか問題点というものを書いてもらいました。

校訂と叙述の関係について、少し具体的に紹介します。「新安保条約」反対運動の時になりますが、「十一月二十七日安保改定阻止第八派統一行動に参加した全学連が国会構内に乱入するという事件があり、これに関連して、東京大学の二名の学生葉山岳夫、清水丈夫の両名に逮捕状がだされた。ところが清水は本郷構内に、葉山は駒場の寮内に逃げ込み、逮捕に応じない旨を表明し、『籠城事件』として問題となった。」という記述があります（「通史三」八五三～八五四頁）。例えば個人名を入れるかどうかという話がまず議論になりました。名誉的なものならいいが、この場合はどうなんだろうか。それには彼らのその後がどうなったのかを調べなくてはならないわけですね。それから本学学生と言った時に学部を入れるべきじゃないか、という議論も出るんですね。さらに「籠城事件」として問題になったというんですが、書いた人は籠城事件ではなくてその後が大事だというんで籠城事件の結末を書いていない。そのままずっと籠城していたのか、という話になるわけですね。そうすると籠城事件の結末を調べる、というように繋がっていきました。この籠城事件は彼らが再びデモに出発して、構外で捕まり落着しました。「紛争」に関しては資料を限定して書き、大学の対応を明らかにするということだったんですけれども、さらにその上に、当然かもしれませんが、正確を期するというんでしょうか、状況をちゃんと把握して書くということが行われました。

もう一つは、学生運動の団体の呼称、呼び方ですね。日共系・代々木系とかですね、その呼称についてどうにかしなければいけないんじゃないかという議論があったのが私のメモに書いてあります。共闘系・全共闘系という表現でいいのか、反代々木系はまずいのではないか、といったことですね。代々木系ということで分かるのはごく一部の人で、若い編集室員の中には、山手線の代々木駅にどうして「反」が付くんだろうというようなことでしたね。このように呼称もまた正確さを期するということになりました。

もう一つは、集会の員数のことですね。何千人の集会と書くわけですが、大学構内ですから基本的に警察が入れない。警察が人数を数えられないわけですね。普通、街頭の集会、デモですと、参加人数は警察発表と主催者発表との二通りになります。大学の集会、デモの場合は学生側と大学側とになります。大学側は人数をあんまり正確に把握しないんですね。かなり多めに数えたようです。こうなると参加員数はどこで決めたのかという話になるわけです。拠るべき警察のデータもないということで、この員数に関しては結局学生側の発表で仕方ないんじゃないかという議論もありました。

もう一つは資料の引用にかかわる議事録の問題でした。「紛争」の時の評議会の記録は、しばしば訂正されました。会議の議事録は、一般的に次の会議に配布された段階で了承されます。「紛争」の時はいろいろと修正が入りました。議論された時の記録だけに目を通して書いてしまうと、大きな過ちを犯すことになります。ですからこの時期の叙述にあたっては、かなり注意をしました。評議会の記録について

は次回・次々回というように、長いスパンを取りました。それが今回の叙述についての一端です。

五、おわりに

1　未収集の資料、新しい資料の発掘

一つは、未収集の資料、新しい資料の発掘というのがやはり基本としてあると思います。先ほどお話ししましたように、「通史三」を編纂している段階でも、戦後改革にあたってはGHQ文書を見なくてはならないんだ、欠くべからざる資料であるという認識はありました。ただ、やはり、先ほど羽田さんもおっしゃったように、一つの大学の沿革史誌編纂の枠をはみ出る大規模なプロジェクトなんじゃないかという予感があったんでしょうか、GHQ文書については収集しませんでした。大学史史料室は「新制東京大学成立の調査研究」というプロジェクトにかかわり、GHQ文書の収集を検討しました。いまだごく一部分しか新制東京大学関係資料は集まっておりませんで、それまで知っていながら集められなかった資料を集め始めたということですね。それから新しい資料、これは戦後のものもどんどん出てくる可能性があると思います。先ほど言いました「紛争」関係もそうですし、事務局職員の資料も寄託されてきております。

2　紛争の及ぼした影響、周辺事情との関連

それから「通史三」に関わっての叙述についていいますと、「紛争」の及ぼした影響という視点が、今の段階あるいは今後大学史を書くにあたってはあると思いますね。大学の管理運営・組織の問題で「教授会はつまらない時間ばかり過ごしている」とかですね、「教授会は何やっているんだ、あんなのは形式に過ぎない」というようなイメージを大学人が持ち始めたのは、大学「紛争」の後ですし、教育研究の質とか対社会的な活動なんかもやはり多かれ少なかれ「紛争」というものがどこかで影響しているんじゃないかというような気がいたします。「紛争」そのものの解明とともに、大学文化史に及ぼした影響も重要な視点になる、と思います。この点では、大学の社会史的視点を念頭に置かなければいけないと思います。

もう一つはですね、「通史三」は「何しろとりあえず書いてみよう」というふうに始まりましたので、取り上げた事項と周辺事情との関連づけはほとんど付けられていないような気がいたします。歴史のダイナミズム、戦後史の流れのなかで東京大学の改革がどのような意味を持っていたのかとか、これの原因はこんなところにあったんじゃないかとか、もうちょっと広い裾野の中で考えてみることが、求められるでしょう。一九九九年は新制国立大学五〇年目にあたりました。多くの大学が沿革史誌を作り始めております。少しずつ現代史も蓄積されてきておりますので、個別の大学史はそれらとの関連づけをしなければいけないんだろうとも思います。

3　書き直されることの覚悟

「通史三」を取り上げ「とりあえず何しろ書いてみよう」と手探り

状態でやったため、書き直されることを覚悟だということをお話をしてきました。その意味では、戦後のどの大学史もすべて、書き直されることを覚悟しなければならないのではないか、と思います。そして、そのことで新しい歴史編纂物になっていくんだろうという気がいたします。では、どんなものにするか。私はちょっと決めかねます。難しいと思います。先ほど羽田さんがおっしゃられた評価を含んだ沿革史というのは、今はそうだろうけれども一〇年、二〇年で耐えうるものになるのかということになると、ちょっと疑問が生じます。では何しろ正確に書くのがいいのかということになると、そうとも言えないないだろう。その正確さというか綿密に書くというのでしょうか、漏れ落ちのない、いろんなものをちゃんと書いておくというのだけれども、それは羅列主義に陥るのではないか。このように常に一長一短があると思うんですね。いまだ、戦後大学史の叙述、編纂は試行錯誤が続くのではないでしょうか。

―――――――――――――――――――――――――――――

追記　本稿は一九九九年一二月一〇日に行った講演テープを起こした原稿をもとにまとめた。ただし、若干の補遺、削除などの加筆を施した。

東京大学百年史編纂にかかわる記事については、本稿に掲げた以外に左記を参照してください。

特集「百年史編纂をふりかえる」『東京大学史紀要』第六号、一九八七年

伊藤隆「『東京大学百年史』編纂に関わった一人として」『東京大学本郷キャンパスの百年』所収、東京大学総合研究資料館編、一九八八年

寺崎昌男「大学文書の保存と活用を―『東京大学百年史』の編纂体験に寄せて」『プロムナード東京大学史』所収、東京大学出版会、一九九二年

中野実「東京大学百年史の編纂過程とその問題点」『東洋大学史紀要』第六号、一九八八年

なお、沿革史誌編纂の全般については、寺崎昌男・別府昭郎・中野実編著『大学史をつくる―沿革史編纂必携』東信堂、一九九九年、を参考にして下さい。

（なかの　みのる・東京大学史史料室・助教授）

本稿は、広島大学五十年史編集室主催第七回研究会「新制大学の五十年と大学史の課題」（一九九九年一二月一〇日、大学教育研究センター（当時）と共催）において行われた講演をもとにまとめたものです。『東京大学百年史』（通史三）の編纂経験に基づく戦後大学史編纂に関する貴重な内容であり、改めて中野実氏に感謝します。なお、第七回研究会において行われた塚原修一氏・羽田貴史氏の講演については、本紀要第二号を参照してください。

（広島大学五十年史編集室）